

# みのの EDO

東京⇄笠原情報誌 MAIL版

## CERASTA 2024 開催!

### タイルで未来を 魅せんねん

8月30日(金)~31日(土)の2日間、大阪市中央公会堂でタイルの祭典「CERASTA (セラスタ)」が開催された。台風の襲来により開催が危ぶまれたが、ほぼ予定通りに実施。東京からの取材がかなわず、実行委員会の中心を担った4人の方に会場の様子をお聞きした。

会場は  
大阪市中央公会堂!



メイン会場の中集会室の様子。  
国指定重要文化財の空間で、タイル尽くしの2日間。



協賛企業の展示ブース



会場で配布された  
パンフレット。

セラスタは、「ceramic tile festa」の略称。これまで同名のイベントが東京で3回開催されたが、今回は規模を大幅に拡大。「国内最大のタイルの祭典」と謳う。主催したのは、タイル商社や問屋、メーカー、職人といった有志による実行委員会。目的に「タイルの魅力を伝え、タイル文化を築く」「タイルに関わる仕事を子どもたちのなりたい職業にする」などを掲げた。

8月末の開催週は日本列島が台風に見舞われ、前日から新幹線が運休する事態に。中止も考えたというが、内容変更の可能性も示しつつ開催を決定。結果としてほぼ予定通りに実施することができた。大阪は会期中、一時雨が降った程度だったといい、2日間で1300人の来場者を集めた。

イベントは、職人体験や展示、講演会にシンポジウムと盛りだくさんの内容。メインの一つが「タイルディスカバリーツアー」。職人の指導の下、タイル張りの一連の作業を体験するもので、待ち時間が発生したほどの人気だったという。

会場が大阪市中央公会堂であったことも盛り上がりに一役買ったようだ。築100年以上の国指定重要文化財で、職人体験の材料の持ち込みや床の養生にも

気を使ったというが、当時の職人たちの技術を結集して作られた空間は、集う人たちの気持ちにも作用したはず。タイルの未来を願う場として、ふさわしかったのではないだろうか。

CERASTA実行委員会

左から東弘毅さん(会長)、島津範子さん、白石普さん、吉永美帆子さん。

今回のイベントは、大阪のタイル卸会社に勤務する島津さんがタイル職人の白石さんに講演を依頼したことが発端となった。



講演会のゲスト・平川克美さんが主宰する「隣町珈琲」(東京都品川区)にて。

# タイルディスカバリーツアー ～タイル職人体験

職人の指導の下、タイル張りの工程を体験する  
5つのブースを設置。  
すべての工程を体験した人に、  
「タイル職人認定証」を贈呈した。

## 1 墨出し (タイル張りの基準線を引く)



## 2 パサ (モルタルで下地をつくる)



## 3 タイルカット

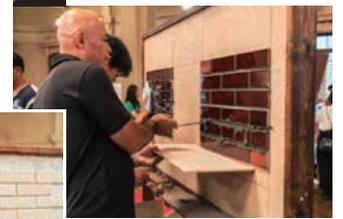


## 4 タイル張り



講演会の進行を務めた野村雅夫さんもタイル張りを体験。

## 5 目地詰め



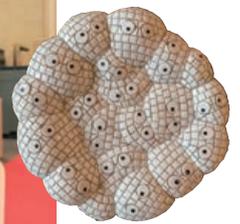
左官職人の久住有生さんが技を披露。あっという間に人だかりができた。



エントリーした人にCERASTAの焼き印が入った椅子を送付。  
タイルで装飾後に送り返すシステム。スペインや韓国からの参加もあったという。

# スワールドカップ ～タイルチェアコンペティション

「継承」をテーマにタイルを座面に使用した椅子を公募。  
応募作品103客を会場に展示し、来場者が3客を選んで投票。  
最も得票の多かった作品を「ベストスワールド」として表彰した。



第1回ベストスワールドに輝いた土屋忠宣さんと作品  
「白い雲の下で仲間と共に」

CERASTAのウェブサイトにて全作品を紹介中



特別室では、タイル関連の本や  
ゲスト登壇者のおすすめの本や  
著書を紹介。かつて貴賓室とし  
て使用された空間で、ゆったり  
と本を手にとることができた。

## 座談会・講演会・ライブなど

30日は大集会室で講演会やライブを開催。

小集会室では2日間にわたりセミナーやシンポジウムなど多彩な企画が実施された。



宮崎吾朗さんはオンラインで参加。  
大山政彦さん(左)、白石普さん(右)

### ジブリパーク座談会「タイルの熱い風」

大山政彦×宮崎吾朗×白石普

ジブリパークの大倉庫のタイル装飾はどうやって生まれたのか。制作現場を指揮した宮崎吾朗さん、設計監理を担った大山政彦さん、タイル装飾を手掛けた白石普さんが完成に至るまでを振り返った。

タイルを使った理由を宮崎吾朗さんが明かす。色や形で自由度の高いタイルなら面白いものが作れると思ったこと。アニメーションで描く架空の空間の鮮やかな色彩性を現実化したかったこと。また、色褪せないことにも言及。ジブリパークに込めた思いとともに、「タイルを使うということは、建物の永続性を願うことだと思う」と語った。

白石さんは「タイルは焼き物であり、それぞれに違うことが魅力。それを上手く生かして張るのがタイル職人。大山さんや吾朗さんのように理解がある方が増えるとタイルの可能性が広がる」と話し、焼き物としてのタイル文化を伝えていきたいと締めくくった。

### 講演会「学びの『場』を作るとのこと」

平川克美×内田樹

内田樹さんは合気道の道場「凱風館」の館主、平川克美さんは喫茶店「隣町珈琲」の店主として地域に開かれた学びの場を主宰。「場」にまつわる様々なエピソードが語られる中で、学びの場とは、ビジネスとして教育的コンテンツが提供される場ではなく、なんとはなしにそこに出向いてしまう吸引力を持ち、自分のすべきことに気づける場ではないか、と考察。最後に大阪市中央公会堂にも言及。内田さんはここでの講演後は面白いことが起きると言い、この空間が持つ力と、それを感じ取れる感性の大切さについて語った。



平川克美さん(上)  
内田樹さん(下)



佐々木康至さん(上)

高山登志彦さん(左)、  
久住有生さん(右)



### 職人座談会「職人の修辞学」

久住有生(左官)×高山登志彦(煉瓦職人)×佐々木康至(タイル職人)

今の時代、職人はどう情報発信していくべきか。久住有生さんはオブジェ制作や壁塗りのデモンストレーションなどにより一般の人へのPRにも力を入れる。独自性に富んだ施工を行う高山登志彦さんは、通常の仕事の合間に好きな彫刻を続け、それが人目に触れ仕事に繋がった。佐々木康至さんはタイル情報をInstagramで9年間毎日投稿している。

タイル業界の未来のために何をすべきかの問いかけに、久住さんは技術を共有する講習会の開催など、左官業界の取り組みを紹介。高山さんは職人を料理人に例え、煉瓦やタイルという素材を使い職人がもっと自由に表現することを提案。またメーカーと組みオリジナルの素材を生み出すなど、職人が活動の幅を広げることで、突破口が見出せるのではないかと指摘した。

#### ■その他の企画

シンポジウム「記憶に残る空間・愛される建築とタイル」

大西麻貴×中村裕太×高岡伸一×水野晶太  
/ナビゲーター 竹口健太郎

講演会 タイルとおおさか 阿部文知

女性職人座談会/タイル組合座談会/タイルに関わるセミナー  
H ZETTRIOのこどもの日 Special Free Live ~タイル編~  
LIVE~CERASTAテーマソングお披露目公演~ 虎鷹



ライブの様子。H ZETTRIO(左)、虎鷹さん(右)。

### イベントを終えて「今後も継続していきます！」

島津範子さん(セラスタ実行委員会/三国タイル)

当日は一般の方、設計士さんや工務店さん、職人さんも来てくれました。華やかな場に来ることの少ない職人さんが大勢参加し、楽しんでくれたことはとても嬉しかったです。

今回のイベントを通し、タイル業界で業種や職種を越えたつながりができました。タイル文化の普及という最終目的の前段階となる大きな成果が得られたと思います。イベント会社を入れず、自分たちだけで作り上げたことは大変でしたが、ノウハウが蓄積されたことは大きな収穫でした。今回得られたものを今後どう生かしていくかが考えどころです。

来年は名古屋、再来年は東京で開催し、また大阪に戻る予定です。ご期待ください。

## 昭和モダン モザイクのいろいろ 板谷梅樹の世界

8月31日(土)～9月29日(日)、泉屋博古館東京(東京・六本木)にてモザイク作家・板谷梅樹の展覧会が開催された。

活躍したのは昭和初期から30年代。作品を一堂に集めた初の回顧展ながら、開館前に行列ができるほどの人気ぶり。

ここでは壁画から小品まで多彩な作品を紹介。

また、モザイク作家・喜井豊治さんにコメントをいただいた。



「きりりん」昭和30年代／個人蔵



「飾り皿」昭和20年代／個人蔵



「バラ」昭和30年代／個人蔵



今回、新たに展示に加わった作品。  
「花」昭和30年代／個人蔵

板谷梅樹(1907～1963)は、陶芸家・板谷波山(1872～1963)の五男として誕生。幼い頃、波山の失敗した陶器の欠片で遊んでいたことがきっかけとなり、モザイクの世界へ。多くの作品を制作し、日展の評議員も務めたが、現代ではほとんど顧みられることがなかったという。

今回の特別展は、2020年の波山の巡回展で「波山の息子さんの作品を持っている」という人が現れたことが契機となり実現。展示作品のほとんどは「個人蔵」であり、多くの作品を一堂に見られる貴重な機会となった。

この特別展は、4月～8月に板谷波山記念館(茨城県筑西市)で開催。ここでも作品を所蔵する人からの申し出があったといい、泉屋博古館東京の展示に加えられた。

### 壁画からアクセサリまで

入館後、ホールで出迎えるのが、現存する最大のモザイク壁画「三井用水取入所風景」。高さ3.7メートルの大作だ。横浜水道記念館で展覧されてきたが、同館が2021年に閉館。その後板谷波山記念館に寄贈された。

展示室に入ると、26歳のときに制作した「旧日本劇場のモザイク壁画」が写真と原画で紹介される。日劇の建物は戦争の被害を免れたが、絵柄が時代に合わないとされ、20年間、ベニヤ板で覆われるという憂き目に。日劇の解体時に発見、20年館保管されたが、結局処分されてしまう。

壁画作品の運命の明暗を感じさせるが、続いてモザイク画、テーブル、飾箱、飾皿、アクセサリといった多彩な作品たちが登場し、“梅樹ワールド”を展開。その色鮮やかさ、絵柄の大きさに魅了された。

昭和8(1933)年に完成した日劇のモザイク壁画。  
陶片を用いて制作。  
下絵は洋画家・川島理一郎(1886～1971)の作品。

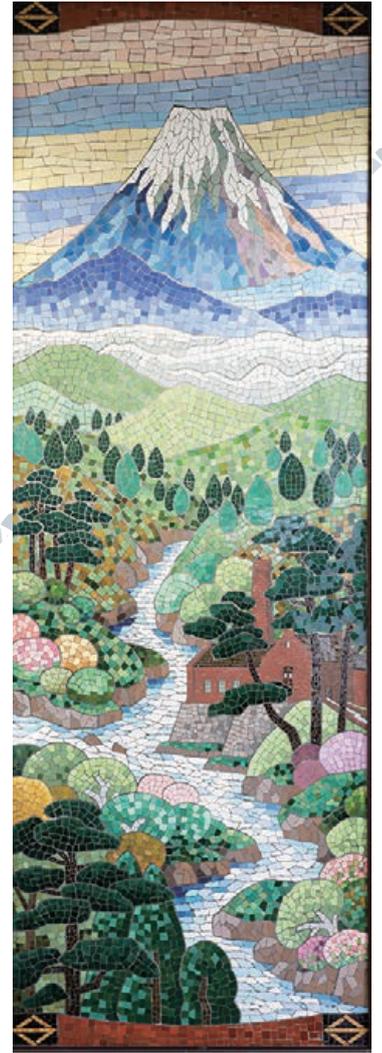




「花」昭和30年代／個人蔵



「鳥」昭和34(1959)年／個人蔵



「三井用水取入所風景」昭和29(1954)年／板谷波山記念館



「机」昭和20-30年代／個人蔵



梅樹はステンドグラス作家・小川三知の下で学んだ時期があり、作品も制作している。「ランプシェード」(台座：板谷波山)昭和10年代／長谷川コレクション

飾箱は螺鈿細工のように細やか。銀の装飾が施されている。「飾箱」昭和10年代／個人蔵



### 孤独な探求を続けた先駆者

モザイク作家・喜井豊治さんは、梅樹と作品をどう見たらうか。「板谷梅樹氏のモザイクは、装飾技法と割り切ったストレートな心情に貫かれていて、明るく気持ちがよい。戦前からのモザイク作家はほかに知らない。孤独な探求を続けたのだろう。1963年没とのことだが、そのころオリンピックを前にして、次々とビルが建ちモザイク

壁画が大量に作られていた。壁画を作る会社と接点を持ち、壁画を作る機会と、志を同じくする仲間に出会っていたらよかった。多分少し早く生まれすぎたのだ」

戦争の影響を大きく受けてもいる。時代が違えば壁画作品も数多く制作されていたかもしれない。そう思うと少し残念でもあるが、今回作品が世に出て、広く注目を集めたことは喜ばしい。今後も新たな作品が見つかることを期待したい。

**\*2025年4月にINAXライブミュージアム(愛知県常滑市)で展示が予定されています。**

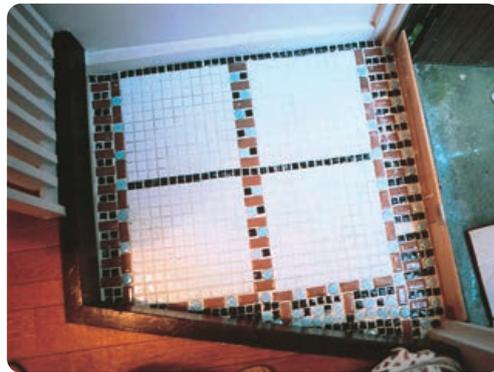


### タイルを削ってモザイクに!

モザイク制作には、最初は陶片を用いていたが、量が足りずにタイルの表面の釉薬部分を薄く削って使うようになった。道具類／個人蔵

# 第2回 タイルとイラスト

ご自身のタイルの関わりを披露していただく不定期連載。  
 第2回目は、イラストレーターの杉浦さやかさん。  
 可愛いイラストとともに綴られたエッセイでは、  
 タイルの話題がたびたび登場。  
 今回は玄関床にタイルを張った思い出を書いてくださいました。



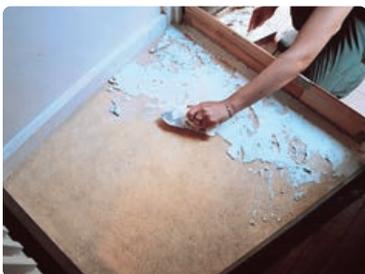
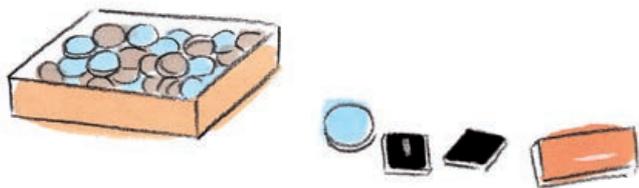
## 永遠のタイル床

杉浦さやか イラストレーター

### 理想のお風呂場

ひとり暮らしのころ、物件探しは「古い、清潔、日当たり良好」を条件に見てまわった。木の窓枠やすりガラス、懐かしい味わいの建材に出合えるのがたまらなかった。お風呂場は、昔ながらの玉石タイルの床が理想。そんなわけで、古いバランス釜の風呂ばかりに浸かってきた。

最後に住んだ、昭和40年代に建てられたテラスハウスは特に大好きだった家。庭付きの2階建ての部屋が並んだ長屋のような物件で、造りつけの棚に木の階段、どこをとってもいい味わい。お風呂がタイル床じゃないのは残念だったけど、魅力だったのが自由に手を加えられたこと。棚を取り付け、庭にデッキを敷き、DIYに励んだ。中でも最高傑作と自負するのが、タイル敷きの玄関床。



### 絵を描くように

もとはくたびれたクッションフロアが敷かれていて、ここだけがどうしても気に入らなかった。考えあぐねていたときに近所の古道具店で出会ったのが、デッドストックの小さなタイル。黒、水色、白、茶色の小さな丸や四角のタイルが詰まった箱を前に、宝箱を見つけたように胸が高鳴った。素朴な風合い、自然にあせた色、「これを玄関に敷いたらかわいいに違いない！」

白いタイルシートの周りを古タイルで埋めたのだけど、前もってデザインを考えていたわけではなく、即興。手伝ってもらった友達と二人、「楽しいねえ」と絵を描くように黙々と置いてった。ほんの小さな面積なのに、思いのほかセメントが必要で、途中自転車で慌てて追加を買いに行く、なんてハプニングもありつつ、無事完成！ 帰ってくるたびに心躍る玄関を手に入れられて、大満足。6年後に結婚を機に出ていくとき、剥がしてもっていきたくらいだった。

その後誰も住むことなく、取り壊されたテラスハウス。跡地には銀行の寮がたち、当時の面影はない。今も自転車で行ける距離に住んでいるので、前を通るたび、心の中に鮮やかに残る、庭や玄関タイルに思いを馳せる。少しさみしくあたたかく、なんとも切ない、いい時間。

セメント 1kg×5袋



### 杉浦さやか(すぎうら・さやか)

日本大学芸術学部在学中にイラストレーターの仕事を始める。旅や生活、手作りなどについて綴ったイラストエッセイが人気。『すきなもの たのしいことAtoZ』『ニュー東京ホリディ』(ともに祥伝社刊)など、著書多数。

\*12月下旬に新刊『わたしたちの歳時記』(ワニブックス)が発売予定。  
 季節の手作りを満載した本だそうです。

『ひっこしました』(祥伝社黄金文庫)より。